

保育における音楽教育の歩み — 伊澤修二の音楽教育観 —

細田 淳子

(平成8年9月30日受理)

A History of Childhood Music Education in Japan — Shuji Isawa's Idea of Music Education —

Junko Hosoda

(Received September 30, 1996)

1. はじめに

我が国の幼児教育は、明治9年に初めての公立幼稚園として東京女子師範学校附属幼稚園が創設されたことに始まったとされている。以来現在まで、幼児教育は多くの保育者や研究者の努力によって、さまざまに発展してきた。そのなかで、感性と表現に関する領域「表現」と呼ばれている中に含まれる音楽的な教育だけに限って考えてみても120年間の進歩にはめざましいものがある。

幼児教育史の中の、音楽的な領域に関する研究には、多数の先行研究がある。こうした研究の大多数は、唱歌の、歴史や構成音やリズム等の内容に関するものであったり、作曲家や作詞家についてのものであったり、あるいは指導法についてのものであったりする。つまり、音楽的な視点からの研究がほとんどである。

一方、幼児教育の歴史の中で、保育者として或いは研究者として保育を動かしてきた人々の思想や業績に関する研究も非常に多い。しかし、我が国の保育を動かしてきた保育者や研究者たちが、それぞれの保育観の中で保育における音楽的な領域についてどのように考えてきたか、どのくらいの比重を持たせて実践してきたか、という点に注目した研究はあまり見当たらない。

そこで、ここでは保育の先覚者の実践や研究の中から、音楽教育に関するものだけに限って拾いだし、見直しを行なうと共に、保育全体を見渡しながら、音楽的領域がどのように位置づけられていたかを、他の領域との関係を通して眺めてみたい。それが、現在の表現領域のあり

かたを考え、問題点を探ることのきっかけになると考えるからである。幼児音楽は、音楽だけで成り立っているわけではなく、いつの時代も他の領域と密接にかかわりを持っている。それゆえに、全体とのかかわりの中で考えていく必要を感じる。

本論ではまず伊澤修二を取り上げ、彼の文章や発言の中から幼児の音楽教育（当時は唱歌遊戯）にかかわる考え方を探ってみたい。伊澤修二は、明治初期に唱歌教育を最初に始めた人物であるとされているが、保育に関してきちんとした思想をもって唱歌教育を導入したのであろうか。それとも保育については、はっきりとした考えをもたずに、日本に西洋音楽を広めるための方法のひとつとして、唱歌を考えていたのであろうか。また伊澤自身の文章の中に彼の一生の中で二度ほど、「幼稚園の試みを行なった」とされている箇所があるが、それは、いったいどのようなことを指しているのだろうか。本論では以上のような疑問点をも明らかにしたい。

2. 伊澤修二の業績

伊澤修二（1851嘉永四～1917大正六）は我が国の音楽教育の礎を築いた人物として知られている。音楽辞典にも教育家であり明治音楽界の恩人であると記されているが⁽¹⁾、彼の伝記をたどっていくと音楽教育以外にも実に多岐にわたる仕事を成し遂げた人であることがわかる。例えば伊澤の還暦祝賀会においては、音楽学校の生徒達の祝賀演奏のあと、師範教育、音楽教育、体操教育、嚙啞教育、吃音矯正事業、台湾教育、教科書編纂、学制研究会、など各界の代表演説が続いている⁽²⁾。また伊澤が亡くなった時、時の文部大臣大岡良平は、追悼のこと

* 児童学科 音楽表現研究室

ばの中で、その功績の広く且つ大なるに驚きながら伊澤の性格を「開拓的教育家」として次のように述べたという。「明治初年の師範教育から音楽教育、体操教育、聾啞教育、降っては植民教育、国家教育、吃音矯正等、今日の教育上における各種の事業には、大抵、故君が関係するか或いは単独で之を創立せられたのである⁽³⁾。」上沼八郎は、「有能な教育行政家ということよりも、さらに広く、独創的な教育実践家」であり、「建設期の明治教育にとっては、有力なパイオニアであり、プロモーターであった。」と、伊澤を評している⁽⁴⁾。

以上の逸話からも、伊澤がたった一人の人間の一生に成し得た事とは思えない程膨大な業績を残したことがわかる。音楽教育に携わったのは、彼の一生に成し得た仕事の一部分であったのである。このことは、伊澤という人物を「音楽取調掛設置に貢献し、和洋折衷の唱歌教育を推し進めた人」としてだけ認識している人々にとっては驚くべきことであろう。

2-1 苦学の道のり

貧しい下級武士の子として信州伊那郡高遠藩に生まれた彼は、幼少時より農作業の手伝い等に忙しく、子ども時代に特に音楽的な教育を受ける余裕などなかったようである。また彼が生まれたのは幕末の1851年であるので、我が国に本格的に洋楽が輸入される前のことであり、伊澤関係資料のどこにも彼の子ども時代と音楽を結びつけるものは見あたらない。

伊澤と洋楽の最初の出会いは、高遠藩が兵制を洋風に改革し編成した鼓笛隊で、鼓手となった時である。

1867年のことで伊澤17歳のことである。ここで初めて彼は、オランダやイギリスの軍隊行進曲に触れたようである。しかし、彼が情熱をもって取り組んだのは、洋楽ではなく、洋学であった。下級士族出身の身で立身出世するために、科学、文学、数学、兵学、法学などを独学で学び、ガス、石鹼、乾留器などの実験を行なっている。『伊澤修二』を著した上沼八郎は、伊澤のことを「まことに休息を知らないエネルギーの持ち主」とであると述べているが、弟の伊澤多喜男も、「精力絶倫の兄は、殆ど三〜四時間しか睡眠をとらず、次から次へと前人未踏の境地を拓り開いていった」と証言している⁽⁵⁾。

彼の努力と情熱が彼の人生の中にいくつもの幸運をもたらしている。その第一が、洋学中心に学べる大学南校（現東京大学）の貢進生になったことである。貧困と戦

いながらも英語を学んでいたため、明治政府の募った官吏候補生としての推薦条件を満たし、高遠藩から推薦されたためであった。伊澤20歳のことである。

2-2 幼児教育への興味

明治5年の学制発布後に伊澤は、南校から第一番中学と改称された中学で幹事として教育に携わるようになった。そこで中学生の起こした問題で、司法省と文部省の対立がおこった時に、激しやすい性格の伊澤は、自説を曲げなかったという。そのため彼は口論の責任をとらされて謹慎処分をうけた。

南校で学んでいた頃の伊澤は、将来外交官になることを考えていたが、この時自分の性格が外交官よりも教育に向いていると考えたことが、自伝のなかに次のように書かれている。『自分のような性質に偏癖あるものが、外交のことに当れば、如何なる国家の大事を惹き起すかも知れない。— 以下略 —』⁽⁶⁾

この6ヶ月の謹慎期間に彼は、幼児教育に関する本を読み『教育』への興味が芽生えたのだという。それは、南校時代の恩師フェルベック（G.H.F.Verbeck）から借りた「The Child」＝「児童論」である。これはフレベルの思想による保育をする幼稚園に関する内容の本であり、伊澤はこの本によって西洋の幼児教育思想に関心をもち始めたようである。この本の内容を詳しく分析することは、伊澤の幼児教育への考え方を探る意味からも重要なことであろう。

その後明治7年、彼は24歳の若さで新しく設置された愛知師範学校校長となり、教育者としての道を歩き始めた。

3. 愛知師範学校校長時代

3-1 唱歌遊戯の試み

愛知師範学校校長となった彼は、早期教育による人間精神の育成にとって必要なことをまとめ『教授真法一初編』を記した。そしてその理論を生かすため、ここで、早くも伊澤によって唱歌遊戯の試みがなされていたのである。（明治7年頃）

このことは、後に（明治39年）伊澤自身が保育雑誌『婦人と子ども』のなかで「幼児に課する唱歌遊戯の話」と題して述べていることからわかる⁽⁷⁾。それによると「二十六七年前、明治七年頃、まだ我国に幼稚園といふものがなかったのですが、其のころから私は唱歌遊戯

を起す必要を感じましてフルベッキ氏から、或教育書をかりて読んでみて始めて、フレーベル氏が、大教育家であって子どもに唱歌遊戯を授け、子どものアクティビティ……活動性とでも云ふですか……を養うを主義として居ることを知り、そこで、我日本の学校にも、之れを起すが必要であると云ふ考えから、私が当時の役目たる愛知師範学校長として文部省へ左の件を建議したのです。」として「将来学術進歩ニ付須要の件」の内容を紹介している。その中で唱歌遊戯を奨励する理由としては次の三点を挙げている。

- ① 知覚神経を活発にし、精神を快楽にする。
- ② 人の心に感動を養う。
- ③ 発音を正しくして呼吸を整える。

さらに、「唱歌は精神に快楽を与え、運動は支體に爽快を与えるものだから、教育上片よらずに行なわなければならない。しかし運動の中でも体操は、一般的だが、年令幼弱で筋骨軟柔の幼児には、動きが激しすぎて害があるので下等小学には遊戯がいいのだ。」と述べている。

そして、「実際にフレーベル氏、其の他諸氏の論説に従って、本邦固有の童謡を折衷して二三の小謡を制作した」とも述べている。例として『椿』の唱歌と技態、『胡蝶』の唱歌と技態、『鼠』の唱歌と技態、が表わされている。また『胡蝶』に関しては、「この遊戯で地球が自転し太陽の周りを回ることを模倣して、地動説を教える一助とする。」ということまで書かれており、興味深い。

3-2 一度目の幼稚園の試みの真偽

伊澤が唱歌遊戯の必要性を感じ実践したことは、「幼稚園」と呼んで良いものなのだろうか。しかしこの試みがどの程度実践されたものかは不明である。何歳の子どもが何人くらい集まったのか、期間はどのくらい続けたのか、施設を特別に作ったのか否か、等ははっきりしないのである。自伝の中で、彼は次のように述べている。「師範学校の一事業として、今日の幼稚園に似た仕事を仕た。即ち幼い子供を集めて遊戯唱歌を教へたのであって、今日全国に唱はれる蝶々の歌（小学唱歌集初編）の詞は、全く此時に出来たのであった。」⁽⁹⁾ また、「婦人と子ども」の中に伊澤自身が自画自賛するように、三十年近くも後になってから次のように述べている記事もある。

「下等小学と云ふのは、丁度、今で申すと、尋常一、

二、三年に當りますが、この時代には、まだ、幼稚園の教がなかつた故、最下級には学齡未滿のものをも入れ、今日の幼稚園の如き仕事をもしたことです。」

ここでいう「幼稚園の如き仕事」が幼稚園を作ったということになると、定説になっている我が国最初の東京女子師範学校附属幼稚園が、明治9年にできる以前に第一号の幼稚園が愛知に生まれていたことになる。しかし、伊澤が学校長として愛知に赴任していたのは、明治7年3月から同8年6月までのたった1年余りのことであり、それほど多くの仕事はできるはずがなかった、と筆者は考える。

「日本幼児保育史」の中で岡田正章らは、「日本の小学教師第97号」に書かれた伊澤の「幼稚園に類する仕事をした」という主張に対して、「伊澤が保育施設を作ったとするには疑問が多い」としている⁽⁹⁾。その理由のひとつとして、愛知学芸大学附属幼稚園において当時幼稚園があったという証拠となる資料を全く発見できなかったことを挙げている。

ただし、逆に山本正巳の『洋学事始め』では、「附属の幼稚園では、唱歌と遊戯の指導を試みており、これまた、東京女子師範より一足早かった」としている⁽¹⁰⁾。

さらに、上沼八郎の『伊澤修二』においても「師範学校の附属機関として幼稚園風のもの、設け、ここではじめて唱歌と遊戯を教えた。」と書かれている⁽¹¹⁾。

以上を総合的に考えて、本論では、伊澤が幼児とともに実践したことは確かであろうが、「試してみたことがある」という程度のことで、幼稚園を組織したりそのための施設を建設したりしたことはなかった、と結論づけたい。

しかし、ここで注目すべきことは、日本において音楽教育の始まる以前、つまり彼がアメリカへ留学する前に唱歌遊戯の必要性を感じ、その土地の昔からの童謡や古事記などをもとに唱歌遊戯を試作していたことである。そしてこのとき明治8年に早くも文部省に建議していることである。このことは、その後の日本の音楽教育や幼児音楽の発展への重要な基盤になったといえよう。

また、伊澤による一度目の幼児教育の試みは、彼の年表にも書かれぬ小さなものではあったが、伊澤による唱歌遊戯教育が小学生のみならず幼児をもその視野に入れて考えられていたことがわかる点で重要な意味をもつものである。彼は、唱歌はともかく遊戯においてはむしろ、小学生よりも幼児にこそふさわしいと考えていたの

であった。

4 アメリカ留学

明治8年7月、伊澤は文部省から「師範学科取調」として、慶応義塾の高峰秀夫、同人社の神津専三郎と共に米国に派遣された。明治新政府は、海外文化の摂取による日本の近代化をめざしていたため、海外留学生への期待は、非常に大きかった。

伊澤はマサチューセッツ州のブリッジウォートル師範学校に入学した。25歳の彼は、男女混合教育に戸惑いながらも1日7時間、全教科の履修をめざした。しかし、「音楽」と「英語の発音」の2科目には大変苦労したという。このことが次のように自伝の中で述べられている。「学科の成績に於ては、彼地の生徒に劣らず中以上の席次を占めてをった。然るに困ったことが二つあった。一つは中々向ふの人に解る様に話すことができなかつたこと。他の一つは音楽が少しも出来なかつたといふことである従来余の経験談を読んだ人は、伊澤は音楽に於ては、最も得意であつたらうと想像するであらうが、事實は全くそれと正反対で、音譜などが殆んどものにならず、 $\overset{1}{\underset{2}{\text{フ}}}$ だけは可いが $\overset{3}{\underset{4}{\text{フ}}}$ となれば皆上り過ぎて、先生にも叱られ自分は尚ほ種々に苦心したけれ共、それでも殆んど唱歌にならなかつた⁽⁴³⁾。」その後、この2つの難関を乗り越えたことで、伊澤による近代音楽教育や、聾啞教育の芽が芽生えたのであった。

高遠藩で鼓笛隊を経験していた彼も、ド、レ、ミの西洋音階は初めてのことで全く手がでなかつた。しかし、勝ち気の彼は、ボイデン校長の「音楽」は免除しようとの申し出を断り、ボストンで出会った音楽教師メーソン(L.W. Mason 1828~1896)の個人指導のおかげで、無事「音楽」も合格して帰国できたのだ。

この逸話を現代に置き換えて考えても、25歳までほとんど西洋のドレミ音階を耳にしたことのない者が、いきなりそれを学び、歌うということは、想像を越える困難があると考えられる。そして、日本に興味をもっていたメーソンと、伊澤との出会いが、明治以後の日本の音楽の方向を良くも悪くも決定したということができよう。

伊澤は、明治11年帰国直前に「学校唱歌ニ用フベキ音楽取調ノ事業ニ着手スベキ見込書」を目賀田種太郎と連名で文部省に提出している。滞米中に音楽科の克服に苦心した伊澤は、自分の体験を通して音楽教育の欠くべからざることを痛感したことも大きな要因であらう。

一方明治政府は、欧米を手本に「学制」を發布したが「唱歌」に関しては何をどのように教えたらいいのか解らなかつた為、「当分コレヲ欠ク」という但し書きを付けていた。学制によって明治5年に設けられた「唱歌」は伊澤の米国留学からの帰国(明治11年)を待って始まったのであった。

帰国後、音楽取調御用掛になった伊澤は、明治12年「音楽取調ニ付見込書」を提出した中で取調掛の事業の目的を次のように三項目挙げている⁽⁴⁴⁾。

- 第一項 東西二様ノ音楽ヲ折衷シテ新曲ヲ作ルコト
 - 第二項 将来国楽ヲ興スベキ人物ヲ養成スルコト
- (第一・二項共後略)

第三項 諸学校ニ音楽ヲ実施スルコト

第一項ノ手段ニヨリテ新作ノ歌曲ヲ得ルトキハ之ヲ東京師範学校附属小学、及東京女子師範学校附属幼稚園、併練習小学生徒等ニ実施シテ其適否ヲ試ミ其佳ナル者ヲ撰シテ掛図及ビ搖本ヲ製シ漸々他ノ諸学校ニ普及スルノ途ヲ求ムベシ

ここからは、伊澤の新しい音楽教育に対する考え方がはっきり読み取れる。それは、音楽取調掛の目的を西洋の音楽と日本の音楽を折衷した曲を創り、音楽教師を養成することにあるとしている。そして、新しくできた曲は、まず附属小学校と幼稚園で試してみよう、と述べている。

このような日本の新しい音楽教育の方向性について伊澤は、米国留学中から目賀田種太郎等と共に議論を重ねてきている。したがって次の目賀田による「我公学ニ唱歌ノ課ヲ興スベキ仕方ニ付私ノ見込」(明治11年)の第八項も伊澤や目賀田の唱歌と幼児に対しての考えを知る意味で見逃せない⁽⁴⁵⁾。

- 『八、又師範学校ノ演習所幼稚園ニモ右課ヲ教フベシ且ツ唱歌ハ幼児ヨリ始ムルヲ最良最速ノ法トス』

これらの記述の中に、唱歌教育は幼児から始めることが良い、という考えがはっきり明記されていることは、注目に値する。

5. 小学唱歌集の編纂

音楽取調掛は、和洋折衷の国楽をつくることと、音楽教師の養成と、唱歌教材集を編纂して日本中で音楽教育を行なえるようにすることを目的として明治12年に設立されたが、指導者としては伊澤が米国留学中師事したボストンの音楽教育家メーソンを招聘してその任にあたら

せた。

音楽取調掛がメーソンの力を借りてまず最大の努力を払ったのは小学唱歌の編纂であり、次に指導者の養成であったという。メーソンが在任した明治15年までに文部省出版の小学唱歌集初編、第二編は完成し、第三編は大部分出来上がっていた。調子と音程の易きものから漸次むづかしいものに進む唱歌集であって、それに日本語の立派な歌詞をつけた。作曲は、外国の歌が多いが日本人のものも採用され、伊澤の作曲や作詞した曲も含まれている⁽¹⁶⁾。メーソンは米国で歌われている歌、特にスコットランドやアイルランドの民謡などを、日本の音階と似ているため多く選曲したようである。現在も歌われている「蝶々」「蛍の光」「庭の千草」などが含まれている。

伊澤はこうしてできた唱歌を東京師範学校附属小学校と東京女子師範学校附属幼稚園で試みようとした。しかし、誰一人賛成者がいない。そこで彼は文部省の役人にそれらの唱歌を聞かせたが、眠気を催したとか、経文を聞くようだ等と酷評されたという。しかし、メーソンが「蝶々」をヴァイオリンで演奏したところ子どもたちは熱心に唱って躍り上がって喜んだので孤立無援の彼は意を強くし、自分の考えの正しかったことを確認したようである⁽¹⁶⁾。

伊澤は保育について、前出のフレーベルの思想を本から学んだ以外は特別の勉強をした記録はないが、米国留学によって唱歌遊戯の必要性和それを始めるには幼児期からが良いという考えは、より強まったようである。そして幼児には幼児にもわかる歌が必要だと考えていたことが、つぎの資料からも読み取れる。

東京女子師範学校附属幼稚園の創設時の保姆であった豊田美雄子は、「家鳩を教へていましたら伊澤さんが、とんでもないことだ、幼児にこんなむづかしいものをうたはせるのは、〈中略〉と大変に叱られました。自分では子どもが喜んでうたふので、むづかしいとは思わなかったのですが、」と当時を振り返って述べている⁽¹⁷⁾。

遠藤宏によると、「メーソンは欧米の唱歌を正しく伝えようとしたが、伊澤先生はそれも結構だが日本人のための日本的唱歌の必要に重点を置いていた。」という⁽¹⁸⁾。

6. 二度目の幼稚園設立の試み

明治39年の『婦人と子ども』のなかで伊澤は二度にわたって幼稚園に関する意見を述べている。この中で「幼稚園は父母の膝下を離れて社会に出づる門出の場所であ

るから、ここに於いて小児の特質を研究するのが、その目的を達する唯一の手段であるかと思うのです。」として幼児期に将来進む方向や仕事を見極めることが望ましいと言っている。またフレーベル式の幼稚園は日本の社会には不相当であるので理想的な幼稚園を作ってみたいと意欲をみせている⁽¹⁹⁾。

さらにその半年後の文章では「今度幼稚園を自ら経営したのは自ら研究を行なってみようとおもったからである。しかし幼稚園を始めてからまだ日が浅いので、いまは幼稚園教育について確かな意見はいえない。」というようなことが書かれていて、伊澤が幼児教育に興味を持っていたことがよくわかる⁽²⁰⁾。

しかしこの文章の書かれた明治39年ころの伊澤は吃音矯正の仕事等々で多忙であり、保育に興味はあったが本腰を入れる余裕はなかったのであろう。この件は、他のどの資料にも記述がないので、何日間くらい幼稚園を経営したのか、それがどのように行なわれたのかはわからない。また同じ文章において伊澤は、「理想の幼稚園」について、「手技」はむりやりやらせず、天然の動植物に親しませ、規則や規律をきびしく押しつけない、などと述べている。かなり詳しく理想の幼稚園について述べているが、全く「唱歌」に触れていないことに驚きを感じる。なぜ27年前（明治11年頃）には、幼稚園で唱歌を歌うことを奨励していた人物が、この時には、自由に自然の中でにわとりや兎と遊ばせることのみを理想ととらえているのか理解に苦しむほどである。この記述より20年程前から伊澤は、音楽教育以外の仕事が大変忙しくなり、唱歌教育のことを忘れてしまったのであろうか。例えば東京市議員を務めたり（明治22年）、国家教育社社長になったり、東京盲啞学校を兼任したり（明治23年）台湾総督府随員になる（明治28年）などなど同一人物の履歴とは思えない多彩な仕事ぶりである。それにしても、幼稚園経営の意欲はあっても、56歳の伊澤がもつ幼稚園のイメージに「唱歌を歌う子ども」は含まれていなかったことがはっきりわかる点で、驚くべきことと言わざるを得ない。

7. おわりに

フレーベルの思想を基に始まった我が国の保育創成期に唱歌遊戯の重要性を説き、文部省を動かして実践へ導いた伊澤の業績は非常に大きい。まったく何もない状態から、子どもに歌わせる歌を作る作業、指導法を考え保

母らに伝える仕事、また指導者を育てる仕事など多岐にわたる事を成し得たのは伊澤の人並み外れたエネルギーによるものである。西洋の音楽と日本の音楽を折衷させた曲を作り出すという、当時としては画期的な考えは一応成功したと言ってよいだろう。しかし内容的にはまだ試行段階の唱歌であり、文語調の歌詞に筋を打ちながら歌うなど、子どもの心の育ちを助けるとは言い難いものが大部分であった。

本論では、伊澤修二という明治の我が国音楽教育の創始者が、音楽教育つまり唱歌教育を行なうにあたってどのような思想をもってやってきたかを概観してきた。特に幼児教育に対してどのような思想を持っていたのかを探ってきた。

伊澤は、唱歌教育に関しては小学校だけでなく、幼児から教育することの必要性を説いていた。幼児教育に関しては若いころ読んだフレーベルの思想による保育の本「The Child」の影響を強く受けていた。そして幼児教育にとても興味を持っていたことが様々な資料から読み取れる。もし伊澤に十分な時間があつたならば、きっと幼稚園も作ったであろうと考えられる。

しかしながら、保育の経験もなければ、幼児とあそぶ時間をたくさん持ったという記録も見当たらないことから考えて、保育に対する思想を強くもっていたとは考えにくい。また伊澤の音楽的力量は、米国留学で音程をとって歌うことが非常に困難であつたくらいなので、現代日本の西洋音楽の水準から考えて、高いとは言い難い。つまり、彼は音楽教師ではなく教育行政家であり、実に精力的に多方面の仕事をごこなした。その仕事のひとつとして唱歌教育を推し進めたのであつた。

伊澤にとっては、多数の仕事のひとつであつた唱歌教育が、現在の幼児音楽の源となっている。伊澤によって種が蒔かれた明治初期の唱歌を当時の現場の保育者たちはどのように受けとめ、どのように保育のなかで扱ってきたのであろうか。今後は、それらの保育の先人たちの幼児音楽教育観を、引き続き探っていききたい。

本論は第49回日本保育学会における発表に加筆したものである。尚、本学阿部明子教授から頂いた貴重なコメントに対して謝意を表したい。

註

- (1) 標準音楽辞典 p.54 音楽之友社 1966
- (2) 上沼八郎「伊澤修二」p.307 人物叢書98 吉川弘文館 1962
- (3) 上掲書(2) p.1
- (4) 上掲書(2) p.2
- (5) 上掲書(2) p.284
- (6) 伊澤修二君還暦祝賀会編「楽石自伝教界周遊前記」p.19 大空社伝記叢書 23 1988
- (7) 伊澤修二「幼児に課する唱歌遊戯の話」第1巻第1号 p.61 『婦人と子ども』 1901
- (8) 上掲書(6) pp.23~24
- (9) 日本保育学会「日本幼児保育史」第1巻pp.58~60 フレーベル館 1968
- (10) 山住正巳「洋楽事始一音楽取調成績申報書」東洋文庫188 平凡社 1971
- (11) 上掲書(2) p.52
- (12) 上掲書(6) pp.27~28
- (13) 東京芸術大学音楽取調掛研究班「音楽教育成立への軌跡」p.388 音楽之友社 1976
- (14) 上掲書(13)p.387
- (15) 遠藤宏「明治音楽史考」音楽教育史文献・資料叢書第五巻 p.31 大空社 1991
- (16) 上掲書(2)p.101
- (17) 藤田美雄子「幼児教育の今昔」第29巻第1号 p.16『婦人と子ども』1929
- (18) 上掲書(15)p.32
- (19) 伊澤修二〈口述筆記〉「適材教育と幼稚園」第6巻2号pp.54~57『婦人と子ども』1906
- (20) 伊澤修二〈口述筆記〉「幼稚園に関する意見」第6巻7号pp.8~10『婦人と子ども』1906

A History of Childhood Music Education in Japan
— Shuji Isawa's Idea of Music Education —

by

Junko Hosoda

The first Kindergarten in Japan was set up in 1876. Since then, not only teachers of kindergartens but also people who were concerned with childhood education made great efforts to enhance the quality of the education. Although they were involved in variety of activities, music education was, presumably, one of the most important activities in those days. In this paper we would like to focus our attention to Shuji Isawa, who is regarded as the founder of music education in Japan. Particularly we emphasize that he regarded early education of singing as one of the most important factors to develop children's ability.